

## 〈解答〉

- ① 1 いた 2 きんこう 3 ほんい 4 浴 5 優位 6 承知
- ② 1 B・D・E (順不同・完答)
- 2 〔例〕まだ日が暮れてほしくない (12字)
- 3 工
- 4 (季語) 虫なく (季節) 秋 (両解)
- 5 イ
- 6 F

配点 各1点 12点満点

## 〈解説〉

- ①
- 1 「致す」には、「する」の謙讓語や丁寧語(補助動詞にもなる)の用法のほかに、「届くようにする」「ある状態に立ち至らせる」という意味もあり、「思いを致す」は「ある物事に対して心を向ける」という意味となる。「致」の音読みは「チ」で、「招致」「一致」などの熟語に用いられる。
- 2 「均衡」は「いくつかの物事の間で力や重さの釣り合いがとれていること」という意味。「衡」の部首は「行(ゆきがまえ・ぎょうがまえ)」で、同じ部首をもつ漢字には「術」「術」「術」などがある。
- 3 「翻意」は「決心を変える」という意味。「翻」は、「他を意のままに動かす」「急に変える・ひるがえす」「対応するものと入れかえる」といった意味をもつ漢字で、「翻弄」は一番目の意味、「翻意」は二番目の意味、「翻訳」は三番目の意味で使われている。
- 4 「そう」には、「沿う」「添う」という同訓異字があるが、「沿う」は「長く続いていくもの」に離れないように付き従う」「何かに並行した形で続いていく」という意味で、「川に沿って建てられた家」「方針に沿って行動する」などと使う。一方「添う」は「そばに付いている」「既にあるものに新たに加わる」という意味で、「病人に添って歩く」「希望に添う」などと使う。
- 5 「ユウイ」には、「優位」「有意」「有為」などの同音異義語があるが、この問題では、「位置・地位などが相手よりまさることや、そのさま」という意味の「優位」がふさわしい。「有意」は「意味や意義があること」、「有為」は「能力があること」「役に立つことや、そのさま」という意味。

6 「承知」は「事情などを知ること」「依頼・要求などを聞き入れること」といった意味をもつ熟語。「承」の訓読みは「うけたまわ(る)」。送り仮名を間違えやすいので注意する。

②

1 Bの短歌は「音」、Dの俳句は「影法師」、Eの俳句は「蝶」という名詞でそれぞれ終わっている。体言止めにはその歌や句に余韻や余情を生じさせる効果がある。

2 「春日はくれずともよし(＝春の日はずっと暮れなくてもよい)」の部分に、作者の心情が込められている。つまり、「子どもたちとの遊びが楽しいので、このまま日が暮れなければよいのに」と作者は思っているのである。

3 「音なべてしづみ果てたる」は「音がすべて落ち着き払ってしまった」という意味で、何も音が聞こえない状態を表現している。また、後半では、「地球自転の音」さえも聴こうと思えば聴こえるほどだと、静けさが強調されて表現されている。よって、E「完全なる静寂さ」が正解となる。

4 Dの俳句の季語は「虫なく(虫鳴く)」で、この場合の「虫」とは、秋に鳴く虫(スズムシ・マツムシなど)全般を指している。それらの虫が鳴く声を聞くと秋の訪れをしみじみと感じるということから、秋の季語となっているのである。ちなみに、Eの俳句の季語は「秋の蝶」で季節は秋、Fの俳句の季語は「雲の峰」で季節は夏、Gの俳句の季語は「猫の子」もしくは「胡蝶」で季節は春となる。

5 句切れとは、短歌や俳句の中にある内容的な切れ目やリズムの切れ目をいう。俳句の場合は「ぞ」「や」「かな」「けり」という「切れ字」によって句切れの位置を確かめることが一般的である。Eの俳句は二句目の終わり「さすや」の部分に「や」という切れ字があるので、「二句切れ」となる。なお、短歌の句切れは、意味を確かめながら読んでいて、「(句点)」が入る場所であると考えればよい。

6 鑑賞文の中に「小動物の生きる営み」とあることから、Cの短歌は、この鑑賞文にはあてはまらないことがわかる。残りのD～Gの俳句には、「蝶」や「蟻」などの小動物が出てくるので、鑑賞文にある「無限とも思える空間の広がり」の部分ヒントに考える。Fの俳句は、「蟻がつらなつて歩いて道が、雲をいただいた山から続いている」といった意味で、「遠くまで続く道」という想像から、「空間の広がり」が感じられる。つまり、夏の暑さの中で歩き続ける蟻の描写から「小動物の生きる営み」を、「遠くまで続く道」から「無限とも思える空間の広がり」を導き出せるので、この鑑賞文にあてはまるものは、Fの俳句だとわかる。